

アフガンの地へ

今は木曜日の朝、朝食を済ませて一服している、ちょっと気の休まる時間である。アフガニスタンの休日は木・金曜日。通常は木曜日にゆっくりして、次週への活力を得ようとしている。ホテルでは、おいしいアーモンドや干しブドウを出してくれる。アフガニスタンは、いまがちょうど初春といった感じである。朝夕はややひんやりする。また、予想以上に降雨もある。首都カブールは標高1,800m程度にあり、そのせいかどうかはわからないが、階段の上り下り時の息切れから「空気が薄いのでは」と疑ってしまうのが、到着時の印象であった。

アフガニスタンに入り、3週間程度が過ぎた。今回のアフガニスタンへの入国は、私にとって初めての経験である。農業普及関連の調査で入ったのだが、安全管理上からなかなか現場に入ることが出来ない。また、日常生活でも、町中の散策はもちろん御法度で、すべての買い物もローカルスタッフにお願いして購入するようになっている。

とはいえ、現場調査も数回行うことが出来た。カブールの降水量は280mm/年程度と乾燥地に位置していると理解していたが、到着してからは結構な雨に見舞われており、農民にとっては恵みの雨になっていると思われる。小麦・果樹の栽培を中心に行っているカブール周辺の農業は、天水と同時に、多くの農地では伝統的なカレーズによる灌漑水が農地へ配分されている。カレーズは、イランではカナート、湾岸地域ではファラジ、西アフリカではハッターラなどと呼ばれている、水源から縦坑をつないで、農地まで灌漑水を導く水路である。調査地の一部ではこの水路の多くが開水路になっていた。細い水路は上流から合流して、下流ではかなり大きな水路になっていると聞いた。また、アフガニスタンが山岳部の国であるため、日本の段々畑に似た伝統的な圃場整備

が行われている。丘陵地ではその幅が狭く、カブール盆地周辺の低地部ではかなり広い1筆を形成して、のどかな田園風景になっている。

一方で、カブールは人口が急増していると聞く。ある情報では既に400万人を超え、将来的には600万人以上になると聞いた。限られた平地しかないため、住宅が岩山の中腹から、頂上近くまで広がろうとしているすごい光景だ。見た感じは、車が入れるような道路は確認できない。また、目をこらしても車が走っている様子はない。おそらく生活水確保と思われるホースが山頂にのび、急峻な階段を上り下りする人々が見える。一旦雨が降ると、町の道路はぬかるみ、川にはごみが流れている。それでも、みんな荷車を引いたり、野菜を路上で売ったりなどで、賑やかな雰囲気や車の窓越しに味わうことが出来る。ただその中で、交差点や重要施設周辺は非常に厳重な警備隊が配置され、治安が維持されている。

カブール盆地では、周辺山脈の積雪により、比較的水資源も豊富に感じる。また寒暖差の大きな乾燥気候の中でカレーズ等からの灌漑水を利用して、おいしいブドウ、アンズ、リンゴなどの果物も多く生産することが出来る。町中で見る野菜も、これまでに見てきたアフガニスタン以外の国のものと比較しても悪くはないし、実際に果実・野菜は見栄えはともかく味は非常に良い。このような、現場の現況を今後見られるチャンスになるべく多くしていきたい。これまで湾岸諸国でつきあって来たアフガニスタン人、そして本国で出会ったアフガニスタン人も非常に親切で、親日的な印象である。厳しい環境の中で、また安全に気をつけながら多くの日本人専門家が現場で人作りに協力している。さらなる親日派を増やしていくことに私も貢献出来れば幸いである。

(2013年5月財津)



カレーズ水路



灌漑水路がある小麦圃場



岩山の頂上まで届きそうな家屋